

東京女子大学は今年度から「知のかけはし」と呼ぶ必修科目を創設した。専門分野の異なる2人の教員が1つの授業を開講する珍しい取り組みだ。狙いは一般教育の再生にある。森本あんり学長に寄稿してもらった。



森本 あんり

東京女子大学学長

近年の大学改革では学部新設などの「入れ物」ばかりが話題になり、大学教育の中核にあるべき授業内容の改革はあまり論じられない。ことに、戦後日本に導入されたがら学部の独立性に阻まれて開花しなかった「一般教育」は、今日では大規模教室の講義でつまらない授業の代名詞のようになってしまっている。

大学生活のはじめに全学生が経験する一般教育が魅力ある内容でなければ、その後の学習意欲に大きなマイナスとなるだろう。

東京女子大学は106年前の創立時からリベラルアーツ教育を掲げ、実学志向の職業教育とは一線を画した自律的な知の育成と、偏見や既成概念からの自由を追求してきた。戦後、新制大学として認可された際には専門教育の偏重が二度の世界大戦を引き起こしたという歴史的反省に立ち「努めて各専門科目の孤立偏重を避け、相互の緊密な学科的及び教育的連関に注意すること」を明記している。

だが、大学の規模や目的の違いにかかわらず一元的に序列化されてしまう日本社会では、リベラルアーツの理念は曖昧で体感しにくい。2年前に私が学長に就任した時には、学内でもその意義が見失われかけているように思われた。必要なのはこの理念を現

## 授業に異分野の対話を

代に生かし、今日の教育課程に具現化することである。

そこで、今年度からリベラルアーツの要となる一般教育を全面的に換骨奪胎し、従来の科目を原則すべて廃して「知のかけはし」という科目群を始めた。

これは、全く専門の異なる2人の専任教員が対話しつつ進める授業である。毎週交代で一人が講義し、もう一人が自分分野からのコメントをした上で学生の議論をいざなう仕組みだ。いきなり「リベラルアーツらしい授業を」と言われてもできないが、これならいや応なく異分野間の対話と統合を行わざるを得ない。

「リベラルアーツ」文系」というのも日本で繰り返される誤解の一つだが、本学は創立以来理系分野を尊重してきた。知のかけはし科目も人文系と社会科学を横断する「人文社会横断型」と、一方に自然科学系を含む「自然科学包含型」がある。両者で計35科目を提供する予定で、学生は両タイプから少なくとも4科目8単位の履修が求められる。履修時期にも工夫を凝ら

日本経済新聞  
2024年7月1日朝刊

## 教員2人が担当／専門科目に波及期待

### 「知のかけはし科目」の授業の例

#### 心の哲学と科学

哲学(現象学)と心理学(認知科学)の立場から「心とは何か」などの問題にアプローチする

#### 国際政治と科学

「地球温暖化」「化学兵器禁止」という2つの国際問題を通じて科学と政治の関係を考える

#### 図形を離散幾何学と江戸の美術から考える

「タイル張り」などの問題から図形の性質を理解し、歌舞伎の衣装や江戸絵画の具体例を調べる



#### イメージと表象の社会的影響力

日中の「パンダ外交」などを素材に「かわいい」の社会的影響力を多角的に理解する

し、1〜2年次だけでなく卒業までの4年間をかけて取る制度にした。その結果、同じ一つの教室に専攻も学年も違う学生が混在することになり、教員も学生もその違いを架橋しつつ考え、話すよう求められることになった。

導入には2年間の議論と準備を要した。当初は乗り気でなかった教員たちも何度かワークショップを繰り返して、アツくりを模索し始めると次第にその面白さに目覚めた。異分野間の対話が刺激的で有益であることを研究者として知っているからだろう。

それでも一つのテーマで15週分のシラバスを作るには綿密な計画が必要になる。新しい冒険に乗り出してくれた教員に感謝するばかりである。もとより大学の教員は自分の分野で専門用語の通じる相手に話す方が楽である。この授業では相手教員や学生から思いもよらぬ質問を受けて答えに窮することもある。

その時こそが貴重な教育的瞬間である。何でも知っているはずの教員が目の前で考えあぐねている。その姿を見れば、学生たちも一緒に考えるに違いない。スムーズな知識の伝達ばかりが授業ではない。つまずき、立ち止まり、揺れをたのしむ。そういう経

験が学生の頭を柔らかく耕し、学びの面白さを実感させてくれるはずである。

今年度の開講科目を参観したが、いずれもきわめて活発な学びの光景が展開されていた。人間の心について哲学者と心理学者が、地球温暖化について国際法学者と化学者が、それぞれ語り合っている。分野や見解の違いが大きいほど魅力も大きい。

中でも面白かったのは日本古典と数学の取り合わせである。百人一首の在原業平は三重禪(みえだすき)の衣を、話題の漫画「鬼滅の刃」に登場する富岡義勇は毘沙門亀甲の羽織をまとっているが、そうした伝統的な紋様には「長寿」「魔よけ」などの象徴的意味が込められている。他方、離散幾何学の視点か

らすると、これらは「タイル張り問題」となる。平面上に敷き詰め可能なパターンは無数にあるかに見えるが、1種類の模様を繰り返す場合だと全部で17通りしか存在しない。

この授業で学生が提出した自由課題の創造性には驚かされた。単純な幾何学図形ではなく、ワニやタツノオトシゴといった複雑な図形が見事にタイル張りされている。明らかに学生たちもこの授業を楽しんでいるようだった。

リベラルアーツの学びは知的にスリリングなだけではない。卒業後の学生を待ち受けているのは予測も計画もできない未知の現実である。既存の知が通用しない現代世界でこそ、新しい知見に開かれた

## 意識と組織の壁 解消は共通課題

「(学者は)変数が少ないものを美しいと考えがちだ」。人工知能(AI)研究で知られる松尾豊東京大教授の言葉だ。6月、東大工学部主催の中高生向けイベントで聞いた。代表例は

アインシュタインの方程式「E=mc<sup>2</sup>」だという。AIは正反対。人の脳があなたの神経細胞で考えるように多くの変数が働いて問題を解く。学問は扱う変数を減らすべく専門分化し

心をもち続け、自信をもって時代の挑戦に立ち向かえる人を育てたい。これが知のかけはし科目に具現化されたリベラルアーツ教育である。

21世紀の今、学士課程の4年間だけで世界に通用する専門教育ができると思っ人は少ないだろう。では、大学教育の主目的は何か。それは民主的市民の育成である。自分の常識や価値観を共有しない他者と対話し、相互理解を深める能力を高めることである。

近年は「文理融合」というキャッチフレーズもよく聞かれるが、分野横断的な学びは「文字でくくられた「文」と「理」の間だけではなく、人文科学と社会科学の間やその内部でも起る。経済学や心理学を「文」に分類することも、もはや時代遅れだ。

不人気なお荷物のように扱われてきた「一般教育」ないし「教養教育」の全体を魅力あるものに再生させることができれば、その振動は専門科目へと波及して大学全体を活性化させることだろう。

入学人口の減少に対策を講じることも大切だが、それにはまず大学教育の本丸である授業の内容を改善し、学生の学びの意欲を高めることから始めたい。

ていくが、多くの変数でこそ記述可能なものがいっぱいあるのでは、というのが松尾氏の問題提起だった。「知のかけはし」はそうした知の構造変化とも同期する。日本の大学は学部の壁が高く、授業を他学部生に開放するだけでも一苦労だ。教員の意識と組織の壁の解消は共通の課題だ。

(編集委員 中丸亮夫)